

第 2 回国語分科会国語課題小委員会・議事録

平成 28 年 6 月 20 日（月）
13 時 55 分 ～ 16 時 00 分
文部科学省第 2 会議室

〔出席者〕

（委員）沖森主査，森山副主査，秋山，石黒，入部，川瀬，塩田，鈴木，関根，
田中，納屋，福田，やすみ，山田各委員（計 14 名）
（文部科学省・文化庁）岸本国語課長，鈴木国語調査官，武田国語調査官，
小沢専門職ほか関係官

〔配布資料〕

- 1 第 1 回国語分科会国語課題小委員会・議事録（案）
- 2 近年の国語施策における「コミュニケーション」への言及について
- 3 近年の提言等におけるコミュニケーションに関する言及について
- 4 入部委員御発表資料

〔参考資料〕

- 1 「言葉遣い・コミュニケーションの在り方」についての論点
- 2 経団連 2015 年度 新卒採用に関するアンケート調査結果の概要（抜粋）
- 3 コミュニケーション・コミュニケーション能力等の内容に言及した調査の例
- 4 「国語に関する世論調査」におけるいわゆる「コミュニケーション」に関する問い（抜粋）
- 5 「国語分科会で今後取り組むべき課題について（報告）」（平成 25 年 2 月）において未検討の課題の協議で出された意見の整理（平成 28 年 5 月まで分）
- 6 国語課題小委員会における審議スケジュール（案）

〔机上配布資料〕

- 国語関係答申・建議集
- 国語関係告示・訓令集
- 国語分科会で今後取り組むべき課題について（報告）
- 文化芸術の振興に関する基本的な方針 一文化芸術資源で未来をつくる―（第 4 次基本方針）

〔経過概要〕

- 1 事務局から配布資料の確認が行われた。
- 2 前回の議事録（案）が確認された。
- 3 事務局から参考資料 6 について説明が行われた。
- 4 事務局から配布資料 2，3 及び参考資料 1，2，3，4，5 について説明があり，説明に対する質疑応答が行われた。
- 5 入部委員から配布資料 4 「入部委員御発表資料」について説明があり，説明に対する質疑応答の後，意見交換が行われた。
- 6 次回の国語課題小委員会について，平成 28 年 7 月 21 日（木）午前 10 時から 12 時まで文化庁特別会議室で開催することと，10 月以降の予定表の提出締切りが 6 月 22 日であることが確認された。
- 7 質疑応答及び意見交換における各委員の発言等は次のとおりである。

○沖森主査

前回欠席され、本日、御出席いただいています福田委員に自己紹介を兼ねて一言御挨拶をお願いいたします。

○福田委員

福田由紀です。前回お休みしてしまいまして、失礼いたしました。現在の所属は法政大学文学部心理学科です。言語心理学を専門としております。今回、コミュニケーションに特化した内容でということでしたので、少しでもお役に立てればと思います。また、様々な分野の先生方の話を聞いて勉強していきたいと思っています。どうぞよろしくお願い致します。

○沖森主査

ありがとうございました。

まず事務局からの説明をお願いしたいと思いますが、参考資料6について説明をいただき、その後、配布資料2、3及び参考資料1から5についての説明をお願いし、その後で入部委員からの御発表をお願いしたいと思っています。

それでは、まず参考資料6についての説明、よろしくお願い致します。

○鈴木国語調査官

参考資料6「国語課題小委員会における審議スケジュール（案）」を御説明申し上げます。前回お出ししたものでは、各回、何について話し合うか、協議するかというところについて、「コミュニケーションの在り方についての検討等」としか書いていなかったのですが、実際にはコミュニケーションの在り方を審議する上において、具体的な言葉遣いの問題として現れてくるものに関わることも非常に多いことが予想されます。コミュニケーションの在り方と言葉遣いの問題を、単純に回を切り分けて審議していくという形はなかなか難しいであろうと考えました。また、御発表いただく中でも、具体的な言葉遣いの問題についてクローズアップしてお話いただくということもあろうかと思いました。こうしたことから、各回の協議のテーマのところを「コミュニケーションの在り方についての検討等」とコミュニケーションの在り方だけではなくて、言葉遣いということも入れた形で、具体的な言葉遣いの問題についてもここでお話を出していただいて、協議をするということが可能であるということを示すようにしたという、その点の変更があるということで改めてここで説明させていただきました。

○沖森主査

ただ今の「国語課題小委員会における審議スケジュール（案）」、そしてそれぞれの回の課題についての説明でしたが、何か御質問、御意見等ありましたら、お願いいたします。特にございませんでしょうか。（→ 挙手なし。）

ただ今の御説明では、コミュニケーションの在り方という基本的なものだけではなく、言葉遣いの問題という具体的な問題も関連付けてそれぞれ話題として取り上げていくということが了解されたのだと思います。その点、御理解いただきたく思います。どうもありがとうございました。

では、引き続き配布資料2と3及び参考資料1から5を用いて、これまで発表されてきたコミュニケーションの在り方、あるいはそれと関連し得る様々な提言、そして

国語施策での流れなどについての説明を事務局をお願いしたいと思います。よろしくお願いします。

○武田国語調査官

それでは、御説明いたします。資料が大変多いので、これを短時間できっちり全て御説明するのは難しいと思いますが、かいつまんで説明するとともに、今日お出しした資料についてはお時間のあるときに一度お目を通していただけると大変有り難く存じます。

お話しすることは大きく二つです。一つは、前回、今日はちょうど御欠席になってしまいました山元委員から、これまでコミュニケーションに関して様々な分野から出ている提言であるとか、何かまとめみたいなのがあったら紹介してほしいという御意見がございましたので、それに対してお答えする部分です。もう一つは、コミュニケーションという非常に広い、大きな意味の言葉ですけれども、これを扱っていくときに事務局としてどういったことを考えているのかと、そういった御指摘もありました。実際は、事務局としてこの方向に持っていきたいとか、具体的にこういうものにしたいのだというものは現段階ではありません。ありませんが、これまでの議事録ですとか、それから国語分科会で御議論いただいた内容をずっと見ていきますと、おのずからある程度のところが見えてくるかと思います。その辺りについて説明させていただきたいと思います。

まず、一つ目の説明になります。これまでに示されてきたコミュニケーションについての提言ですとか、まとめについて、まずは国語施策の中でどんなことが言われてきたか、これは国語分科会の前身に当たる国語審議会の時代からになりますが、平成期に入ってから近年の国語施策におけるコミュニケーションに関する言及について、配布資料2に大変簡単ですけれどもまとめてあります。

前回、納屋委員から「現代社会における敬意表現」について御指摘がありました。最初に「現代社会における敬意表現」という平成12年の国語審議会答申を挙げています。「敬意表現」という言葉、必ずしも今、世の中に定着しているとは言えないのですけれども、例えば何かコピーをしてもらいたいものがあるときに「コピーして。」と言うのではなくて、「コピーしてもらってもいいか」とか、「ちょっと時間あるか」というように聞いてから、必ずしも敬語ではない言い方で何かを頼んだりするというようなことがあります。そういったものを広く捉えて「敬意表現」というわけですが、「敬語の指針」より前に国語審議会が「敬意表現」についてまとめています。その中にコミュニケーションに関して簡単な定義と言いますか言及があります。定義と言うほどのものではないのでしょうけれども、例えば1ページの一番上に「コミュニケーションとは我々が伝えたい情報や、自分自身の考え、気持ちをお互いに伝え合うことである」と。こういった定義付けと言いますか、意味について余り異論のある方はいらっしゃらないと思うのですが、こういったことをコミュニケーションについて言っています。

そして、さらにここで言っていることとして、下線は事務局で今回引いたものですが、2段落目、何かを伝えようとするときに、まず「伝えたい内容を正確にまた過不足なく伝えるための工夫がある」、次の段落に行って、「伝えたいことを平明で的確に表現するための工夫がある」、そして、この二つについて、その次の段落で「これらは主として情報や考えを論理的に述べ、分かりやすく伝えるという面で円滑なコミュニケーションを支える言葉遣いの工夫である」と、論理的な伝え合いの部分について言っています。

その後の部分で敬意表現について言っています。「ここで取り上げる敬意表現は、以上のような工夫とともに、人間関係を円滑に保ちながら意思疎通を図る上で大切

な言葉遣いの工夫である。すなわち、自分自身の考えを言葉で確実に伝えつつ、相手や場面への配慮を示す敬意表現を使うことによって、円滑なコミュニケーションが可能となる」。さらに、次の段落に行って、敬意表現の定義と言いますか、そういう文言があります。「敬意表現とは、コミュニケーションにおいて、相互尊重の精神に基づき、相手や場面に配慮して使い分けている言葉遣いを意味する。それらは話し手が相手の人格や立場を尊重し、敬語や敬語以外の様々な表現からその時々にはふさわしいものを自己表現として選択するものである」。

今、現代社会における敬意表現の部分を詳しく読み上げたのですが、ここに2点、国語施策で近年言っているコミュニケーションと言いますか、人と人との伝え合いに関するポイントがあります。一つは、伝え合い、コミュニケーションにおいては論理的な伝え合いの部分と、人間関係を形成する部分とがあるということです。もう1点は、敬意表現の定義のところにあったところで、「敬語の指針」にも同じことが書いてあるのですが、コミュニケーションにおける敬意表現についても、そして敬語の使い方についても「相互尊重の精神に基づいた自己表現」であるということを行っています。

この後、幾つかの答申ですとか報告を引いておりますけれども、これらのずっと底にあるものとして今の2点、コミュニケーションにおいては論理的な伝え合いの部分と、人間関係を形成する部分とがあるということ、それから、伝え合い、コミュニケーションにおいては相互尊重に基づいた自己表現という捉え方が大事であるということ、この2点については今後の議論についても是非、念頭に置いて御検討いただければと考えております。

それから、2ページから3ページにかけては、「これからの時代に求められる国語力について」、いわゆる「国語力答申」におけるコミュニケーションに関する言及が引いてあります。国語力答申では、ここはコミュニケーションというものについてどういう捉え方をしているかと言いますと、コミュニケーションの根幹に関わる部分は国語力であるということを行っています。同時に、国語力を伸ばすのはコミュニケーションによるほかないという言い方もしています。つまり、相互依存と言いますか、相互に影響するものとして国語力とコミュニケーションというものを捉えているということになっています。

机上にございます「国語関係答申・建議集」を御覧ください。441 ページに、国語力のモデル図があります。国語力については、国語力答申ではこういったモデル図が用意されております。それから、このちょっと前のページ、439 から 440 ページに掛けて、国語力における目標といったものが掲げられています。つまり、コミュニケーションにおいては、国語力答申が言っているようなことをきちんと身に付けていくことが大切なのだと言っているわけですが、その一つの目標として

439 から 440 ページのような目標があって、そして国語力全体の俯瞰図^{ふかん}みたいなものは441 ページに示されているということです。国語力答申はもちろんコミュニケーションということを前面に出しているものではないですが、この辺りが今後の議論にも、参考の一つになるかと思われます。ただし、439～440 ページには、こういった具体的な目標が一つの例として挙がってはいるのですが、当時の検討の中では国語力に関して、何か明確な目標を決めるのは難しいということも強調されていました。

なお、ちょうど今、学習指導要領の改訂の作業が進んでおりますけれども、その検討の場には、今でも国語力答申の内容が引き合いに出されています。現行の学習指導要領では言語活動の充実ということが大きくうたわれておりますが、そのきっかけの一つになった答申ということです。

次の「敬語の指針」については、先ほどの相互尊重の精神に基づく自己表現のうち、かなり文法的にきっちりと敬語というふうに分けられるような、そういった言葉遣いについて国語分科会として出していただいた指針です。

そして、今回、最後にあえて「国語分科会で今後取り組むべき課題について」の報告の部分も取り出しておりますけれども、これからの御検討の対象として「コミュニケーション」を取り上げていく、そういったお話になっています。国語分科会でこういった点について検討することになっているのかというのは、もうちょっと後で、もう一度お話しさせていただきたいと思います。

ここまで非常にざっとですけれども、近年の国語施策におけるコミュニケーションに関する言及等について、お話し申し上げました。

一方で、国語施策とは別に、コミュニケーションということがいろいろなところで取り沙汰されて、重要な概念として言われてきています。それが分かるようなものを集めたのが配布資料3でございます。実はこの配布資料3に関しては、後ほど御発表いただく入部委員の御発表の資料と多少重なるところがございます。重要なところの説明については入部委員にお任せして、かいつまんでお話ししていきたいと思います。

この資料をずっと見ていくと、ところどころに「コミュニケーション」という言葉が出てまいります。例えば2ページ目を御覧ください。これはOECDが2000年前後に示したキー・コンピテンシーというものの内容です。キー・コンピテンシーとして三つの能力を挙げて、一番上に「社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力」というものがあります。簡単に言うと言葉に関するリテラシーですとか、そういったことを高めるといことになるわけですが、コミュニケーション能力あるいはコミュニケーションのリテラシーというのはこの「社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力」に関わるものだということを言っています。

ところが、2番目のキー・コンピテンシーを見ると、「多様な集団における人間関係形成能力」という言い方をしています。これまでの国語分科会での議論で言いますと、コミュニケーションというのは2番目の能力の部分も当然視野に入れた御検討だったのではないかと思います。

同様に、例えば次の3ページに行きますと「人間力」というものがあります。これは内閣府にできた会議ですけれども、ここでも構成要素、人間力の構成要素の一つに「社会・対人関係力的要素」というのがあって、そこに「コミュニケーションスキル」という言葉が入っています。

その後に「就職基礎能力」というものがあります。ここは、能力を五つに分けているのですけれども、その一番上に「コミュニケーション能力」というのが出ています。国の取組のレベルで出されているこういった提言の中で、唯一と言ってしまうかもしれませんが、コミュニケーション能力をかなり細かく検討しているのが、この「就職基礎能力」というものです。これは厚生労働省が、当時、フリーターと呼ばれるような人が望まずして増えているような状況において、どうしたら学生たちが安定した仕事に就くよう助けられるか、どうやって就職する力を付けるのかということで打ち出したもので、この中にはコミュニケーション能力のことが比較的詳しく規定されています。

その次に「社会人基礎力」。この中では「コミュニケーション」という言葉ははっきりと使っていませんけれども、やはり読んでいきますと、国語分科会で話題になってきた内容とかなり近いところに触れています。また、6ページに行きますと「学士力」というものがあります。これは文部科学省で学士課程共通の学習目標というものを決めた方針ですけれども、その中にも汎用的技能として「コミュニケーションスキル」というようなことが言われています。それから、最後に平成23年

にはコミュニケーション教育推進会議というものが文部科学省の中にできて、ここでもコミュニケーション能力の一つの捉え方が示されています。

ざっといろいろなものをお示ししたのですが、お気付きのように、「コミュニケーション」という言葉の意味が必ずしも一定ではなく、非常にいろいろな使われ方をしているということが、お分かりになると思います。

そのような中で、今ここに取り上げているものの中で共通していることが一つあると思います。それは、「新しい学力観」、「ジェネリックスキル」、「21世紀型能力」ですとか、あるいは「汎用的能力」であるとか、いろいろな言い方がなされていて、それぞれ意味の重なりがありますけれども、これらの提言に共通するのは、単純に、ある専門性やある知識を取り込んで、それをずっと追求していくというだけではなくて、いろいろなものに汎用できるような能力を身に付けるべきであるということ、そして、大抵の提言の中で、汎用できる能力としてコミュニケーションの力が位置付けられているということではないかと思っています。

非常に雑駁^{ばく}な説明になってしまったのですが、コミュニケーションに関してはこのように様々なところでいろいろな言及がなされているものの、細かい内容にまで踏み込んだものは少なく、それぞれがそれぞれの意味でこの言葉を使っているということを見てまいりました。ですから、前回御意見の中で、コミュニケーションという片仮名語をぼんと出して、それをそのまま使っていくのでいいのだろうかというような御意見もあったかと思いますが、正にこのコミュニケーションという言葉について、国語分科会として検討できるところをどのように絞り込んでいくのかということが最初の課題になるのではないかと考えております。

ここまでコミュニケーションという言葉をめぐる国語施策、それから様々な提言の中でどんなような言われ方をされているか、どんな言及があるかということを非常に簡単に見てきたのですが、ここからは、二つ目のお話、今後の検討においてどんなことをお考えいただきたいかということを簡単に説明します。

参考資料1を御覧ください。これは、平成24年11月、12月、今から3年半ほど前の国語分科会で常用漢字表の改定が終わって、今後何を検討していくかということを御検討いただいていたときに、その取りまとめの直前に出た資料です。ここで正にこのタイトル「言葉遣い・コミュニケーションの在り方」についての論点」ということで、一旦このように議論されてきたことが整理されて、それが、現在の机上にある冊子「国語分科会で今後取り組むべき課題について（報告）」につながっています。

この最後の冊子の「報告」では落ちていると言いますか、そこに明示されていない情報を少しお知らせしたいということで、この参考資料1をお示ししました。この中で、こういったことについては検討しないということを言っている点があります。「論点1「言葉遣いについての指針」の作成について」ということで、これまで国語施策の中でやってきた具体的な言葉遣いの指針みたいなものとして、例えば国語シリーズですとか、あるいは「敬語の指針」といったものがあります。そういったものと同じようなものを出していくのかどうかということが論点1にあるのですが、これは置いておきまして、論点2を御覧ください。「論点2「緊急時における言葉遣いの指針」について」。前回の事務局の説明の中で、言葉遣いあるいはコミュニケーションということがテーマに挙がってくる一つのきっかけとして、東日本大震災があったということをお話しさせていただきました。そのときにどのような伝え方をすれば人々の命が守れるのかということが、正にここでも話題になったのですが、この件についてはこの場では扱わないということがはっきりしております。「各分野において既に改善のための取組が行われていることなどから、国語分

科会で取り組む課題とはしない。」となっております。

「論点3「メールにおける言葉遣いの指針」について」。これも議論の中に度々出てきたのですが、最終的に「「メールにおける言葉遣い」については、基本的に、個人的な問題という要素が強いことなどから、国語分科会で取り組むべき課題とはしない」となっています。このように、これら二つに関してはその時点では取り組まないということになっているわけです。

では、どういったことをやっていくのかというのが論点4と5なのですが、論点4にあるように、コミュニケーションに関して、情報化の問題、それから国際化の問題という観点が話題になっていました。これらについては、情報化時代のコミュニケーション、あるいは国際化時代のコミュニケーションということを前面に押し出すのではなくて、「論点5 コミュニケーション能力の育成に関する指針」というものを大きく扱っていく中に入れ込んでいく内容であろうということがそのときに議論されています。ですから、コミュニケーションという観点で言うと、当時どういったことをやっていくかというときに、残ったのは論点4と5なわけです。

では、その論点4と5というのは、もう少し具体的に言うとうどういうことなのかということをお話したいと思います。一つは、先ほどのメールの言葉遣いと少し関わってくるのですけれども、ずっとこの議論の中で、現在は非対面のコミュニケーションがとて多くなっており、対面コミュニケーションの機会が少なくなっている。非対面コミュニケーションが圧倒的に多いと言いますか、以前に比べてずっと増えている。それに伴って対面コミュニケーションが減ってきていて、そしてこれは「国語に関する世論調査」の結果などからも読み取れるのですが、対面コミュニケーションが苦手だという方が増えているのではないかとというのが国語分科会の認識でした。

それで、一つは、対面コミュニケーションと非対面コミュニケーションということ意識した議論をしていただきたいということです。特に非対面コミュニケーションが増えている中で、対面コミュニケーションが難しいと感じている人が多くなっているということにどう対処していくのか。そのときに、先ほどメールについては扱わないというようなことがあったと申し上げたのですが、この3年半の間に相当世の中は変わっていて、その当時はメールという言い方をしていたのですけれども、今例えば高校生や大学生に誰か友達と連絡するときにEメールを使うかという、多分使わないという人が多くなっていると思うのです。そういった状況の変化もあります。ですから、情報化とコミュニケーションの関係というときに、必ずしもメールであるとか、打つ言葉を排除するというのではなくて、それとの関係につ

いても対面、非対面という観点から^そじょう上に上げていただく場合もあるかと考えています。

それから、二つ目は、最初に国語施策の中でずっと言われてきた2点を申し上げたのですが、そのうちの一つです。人間関係の形成のためのコミュニケーションと、コミュニケーションの論理的な伝え合いの側面、このどちらを重視するのか、あるいはどちらが重要なのかといったことをこの中で議論いただいていたことがあります。国語分科会の中では、論理的な伝えの能力の向上については、例えば学校教育をはじめとして、いろいろなところで言われているけれども、対面コミュニケーションの難しさというようなことを考えると、やはり人間関係の形成能力ということがどちらかと言うと重要なのではないかといい御議論が強かったと思っています。ただし、そういった人間関係を形成するためのコミュニケーションの力というのは、もちろん論理的な伝え合いの能力なくしては成り立たないということもありますので、この二つの側面の関係というようなものについても意識していただ

きたいと思っています。

そして、三つ目は、先ほども少し申し上げたのですが、コミュニケーションという非常に意味するところの範囲の広いものになりますので、それをどう絞り込んでいくかということがまず何よりも重要であろうということになると思います。国語分科会ですから、ここではやはり言葉を中心としたコミュニケーション、それを基本として御議論いただくことになるかと思っています。ただ、その周辺にあるものについても当然重要なものがあると思いますので、まずは言葉を基本に据えつつ、扱うべきコミュニケーションの内容をどう限っていくかについて議論していただきたいと思います。

そして、最後に4点目です。これまでの議論の中でコミュニケーションのどの部分を国語分科会が扱うかということを決めていく上で、調査が必要であろうということがずっと言われておりました。参考資料4「国語に関する世論調査におけるいわゆる「コミュニケーション」に関する問い」というものがまとめてあります。これは、例えば、あなたは人間関係を形成するようなコミュニケーションの面と、論理的に伝え合う面と、どちらを重視していますかとか、どちらが得意ですかとか、そういったことも聞いています。つまり、事務局としてこれまでの国語分科会での議論を受けて、国語に関する世論調査で約3年間、コミュニケーションに関する調査を行ってきました。こういった調査を改めて行う際に、こういった調査がある今後の議論に役に立つかということのを是非御提言いただければと思っています。今度の「国語に関する世論調査」は、例年の予定ですと大体来年の2月ぐらいに実際の調査を行います。そうすると、年内、12月ぐらいまでにある程度問いを固めていくのですけれども、その問いの中にこの会議の中で役に立つような問いを加えていきたいと考えているということです。それについて御意見を頂ければと思っています。

その際に参考になるものとして、参考資料2と3を御覧ください。参考資料2は有名な経団連の調査です。今回で12年連続、新卒採用者に期待する要素として「コミュニケーション能力」がトップになっています。ただ、ずっとこの会議の間でも言われていたのは、コミュニケーション能力が毎年トップなのは分かるけれども、ではそのコミュニケーション能力の内容は何なのかというと、それは採用担当者ごとと違うのではないかなというようなことでした。

そのヒントになるようなものとして参考資料3を今回お出ししております。参考資料3の一つ目は、NHKの放送研修センターでなさったビジネスコミュニケーションに関する調査です。ここではコミュニケーションというものをもう少し下位分類して、聞いているような問いがあります。例えば1ページの下、「社員のコミュニケーションで課題と思われるものは何ですか」、ここは具体的なことを聞いています。それから、2ページに行くと、4のところです。「社員には、どのようなコミュニケーション能力の向上を求めていますか」というところで、「的確に説明・報告する能力」、「人の話をしっかり聞き取る能力」、「適切な敬語を使う能力」など、下位分類と思われるようなものが見られます。今後、調査をしていく、あるいはここで議論をしていくときに、コミュニケーションという言葉を絞り込んでいく上で、こういったものが役に立つこともあるのではないかと考えています。

同様に、次の3ページから、一般財団法人日本経営協会というところが定期的に行っている調査があります。第7回ビジネスコミュニケーション実態調査、これはちょうど1年ぐらい前の新しい調査ですけれども、4ページから御覧ください。例えばここでも「組織・職場内コミュニケーションをよくするために必要なこと」として幾つか項目があって、それを選ぶような問いができています。必要とする情報が共有できる環境とか、二つ目に日常の会話がコミュニケーションでは大事だとい

うような意見が強いとか、こういった結果があります。

それから、5ページに行きますと、「組織・職場内コミュニケーション円滑化のために必要な能力やスキル」というと、一番上に来るのは「思いやり・気配り」であったりするわけです。二番目「ビジネスマナー・物腰」、それから「傾聴力」ですとか、こういったものがコミュニケーション能力と言われるもののうち、今社会で必要だとされている面がある。そういったことを踏まえて、国語分科会でどの辺りに踏み込んでいけるのかということをお検討いただきたいと思います。

それで、今日は主査の御指名により、これまでずっとコミュニケーションについて熱心に御意見を頂いてきた入部委員から、まず御説明をいただきたいと思っています。今後、国語分科会の委員の皆様から国語課題小委員会でコミュニケーションの問題を扱っていく上で、どういったことに取り組めるのか、その範囲を絞り込んでいくということで、お考えをいろいろとここで話しいただいて、それに基づいた検討を重ねていただきたいと考えております。今の段階では事務局としてこれをお願いしますということはいえないのですが、ヒアリングを重ねて、また委員の皆様方と御相談しながらここで検討できるコミュニケーションの問題が何であるのかということをお話していきたいと考えております。

○沖森主査

ありがとうございました。ただ今の事務局からの御説明について質問あるいは御意見がありましたら、お願いします。

○関根委員

質問ですが、学習指導要領では「伝え合う力」という言い方をしていますが、これはコミュニケーション能力を単に言い換えたものと考えていいのか、それともあえてコミュニケーションを避けたのは何か意味があるのか。これも国としてコミュニケーション能力に触れた大事なものの一つではないかと思っていたのですが、その辺はどうなのでしょう。

○武田国語調査官

学習指導要領の中でこれまでのところコミュニケーション能力というものはつきり定義付けたものはないと思います。それは、ここでこれから議論していただく上でも同様なのですが、コミュニケーションという、多岐にわたる、意味的にも非常に広い言葉を簡単に定義付けしにくいということだと思います。ですから、「伝え合う力」というのは、コミュニケーションという言葉と重なる言葉でありながら、そのある部分と捉えることもできるかと思っています。現在、検討されている新しい指導要領の改訂の中でも、指導要領そのものの中でコミュニケーション能力というものを新たに引き上げて定義付けするというようなところまでは、聞いておりません。

○沖森主査

ほかに御質問等はありませんでしょうか。（→ 挙手なし。）

よろしいでしょうか。後でもまたいろいろ御意見を頂けるとしますので、それでは一旦事務局からの御説明に対しての質問は終わりにいたしまして、引き続き今度は配布資料4に基づきまして、入部委員から、コミュニケーションの在り方についてのお考えを御発表いただきたいと思います。

お忙しい中、御準備いただきましてどうもありがとうございました。よろしくお願いいたします。

○入部委員

^{せん}僭越ながらトップバッターを務めさせていただきます。入部です。どうぞよろしく
お願いします。先走りして、「社会人言語基礎力」と書いてありますが、後ほど説明
させていただきます。

まずは、2分30秒ほどの映像を御覧いただこうと思っています。今から8年ほど
前に、「クローズアップ現代」を担当しているNHKの首都圏センターから大学生の
論理的表現力の低下について取材させてほしいと取材の依頼が来ました。当時、文部
科学省の特別課題の調査で、中学校3年生だったと思いますが、若者の論理的表現力
が低下しているということで、その実態調査に見えたということでした。そのときに
学校現場の現状把握も大事ですが、むしろ新社会人の現状から何が必要なのかとい
うことを取材されてはどうかと、そちらの方が視聴者に分かりやすいのではないかと
いうことで取材していただきました。20分の番組ですが、必要なところだけをカットし
たので御覧いただきたいと思います。

(映像上映)

○入部委員

この映像が出てから8年の月日がたっているわけですが、現状は余り変わっていな
いように思います。新卒から3年の離職率を御覧いただきたいと思います。これは厚
生労働省の調べによる、平成24年度から平成26年度の就職者の新卒社員の離職率に
なります。御覧いただきますと、3年のうちに離職する大卒新卒社は32.3%。3人に
一人が離職しているということになります。中学卒の新卒社員に至りましては、2年
以内で二人に一人が離職しているという数字になっています。

仕事を辞めた主な理由ですが、「思っていた仕事とは違っていた」とか、「やりが
いがなかった」とか、「会社の環境に慣れなかった」、「職場の人間関係がづらい」
といったようなことが挙げられております。それは結果としての理由であって、実際
は先ほどのビデオで御覧いただいたように漢字の意味が分からずミスをしてしまっ
たとか、あるいは敬語がうまく使えず上司に質問ができないとか、あるいは話し言葉
と書き言葉の区別が付かずに報告書が書けない、あるいは根拠を踏まえて自分の意見
が述べられないといったようなコミュニケーションの滞りの結果、会社の環境に慣れ
なかったとか、あるいは職場の人間関係がづらいといったような理由で職場を去って
いるのではないかと考えております。

コミュニケーション論という授業を大学で担当していて、受講者が400名ほどい
るのですが、そのうち76名の学生にアンケートを取ってみました。配布資料4の中
の資料1がアンケートです。御覧いただきたいと思います。AからNまでの項目につ
いて質問して、「自信がある」あるいは「まあまあ自信がある」、「あまり自信がない」、
「全く自信がない」の4択で答えてもらいました。結果がスライドのとおりです。76
名の対象者ですので半数ではないのですが、「自信がある」という答えで、最も多か
ったのは「D「です ます」などの丁寧語が使える」また、「N 他の人の考えを受け
入れることができる」というところがやや多かったです。「全く自信がない」とい
うものに関しては、「L 難しい内容をわかりやすく相手に伝えること」はできない、
「M 反論されても、さらに主張すること」はできないといったような対人コミュニ
ケーションに不安がある学生が目立っていました。多くの学生は「自信がない」とい
うことですが、「まあまあ自信がある」と言っても自信はないわけです。あるいは、
「余り自信がない」ということで、多くの学生がここのところに位置しております。

結局、自分自身がどのぐらいの力を持っているのか分からないというのが本音だろうと思います。

配布資料4の中の資料1の一番左の「目的」のところですが、実社会で生きていくためには六つのコミュニケーションの目的があると、コミュニケーション論の授業では教えております。最初に、先ほど御覧いただきましたビデオのように、まずは間違った仕事をしないということが最も大事だと思っております。意味が理解できないと

か、あるいは読み方が分からないといった些細なことからコミュニケーションの基礎となる信用を失ってしまう、まず、ここがなければ先には進めないと考えています。

その次ですが、円滑な人間会関係を構築する。適切な敬語であるとか、言葉遣いで分からないことは上司でも、あるいは外部の人間にも質問することができる。そのことによって仕事に自信が付いて、円滑な人間関係が構築されてくると考えています。これが第2段階です。

ここまでできると信頼感というのが社内でも生まれてきますので、より積極的なコミュニケーションを取る必要が出てくる。適切な言葉と適切な表現を使って依頼をしたり、交渉をしたり、感謝の気持ちを伝えるという必要が出てきます。

さらに、先ほど「論理的な表現」というのがございましたが、この上に初めて率直な意見を述べる機会を与えられて、そこできちんと述べることで更に信頼感が深まると考えています。

その上に、徐々に時間がたちますと部下ができたり、あるいは後輩ができたりしてきますので、複雑な情報を分かりやすくかつ具体的に、簡潔に伝えるコミュニケーションというのが必要になってきます。

最終的には第6段階ですが、組織の目標を達成するために建設的な話合いができるようになる必要があると思います。

このように一口にコミュニケーションと言いましても、まずは漢字の意味が分からないとか、あるいは読めないということになりますと仕事を任せることができませんので、まず第1段階から順番に積み上げていくようなコミュニケーションが大事だろうと思っております。これが最初に間違った仕事をしてしまうと信用を得られませんが、人間関係は構築できず、そして信頼感も生まれず、意見を話す機会も得られず、最終的には仕事を任せてもらえないまま失意のうちに離職するという事になってしまうのではないかと思います。そのためにまずは第1段階と第2段階、特に言語的なコミュニケーションの要素が大きな割合を占めている第1段階と第2段階、第3段階ぐらいまで、ここをしっかりとサポートしていくことが大切だと考えています。

コミュニケーションの複雑さの二つ目の要因は、コミュニケーションの要素にあると思います。コミュニケーションの要素ですが、コミュニケーションの要素は大きく分けると、言語的なコミュニケーションの要素と、非言語的なコミュニケーションの要素があると思います。言語的な要素ですが、全体から見ますと30%、残り70%が非言語的な要素ということになります。コミュニケーションは扱いにくいものだと思いますけれども、その30%の中身についてお話ししたいと思います。

30%の中身ですが、まずは個人的な要素があります。性差、女性らしい言葉、男性らしい言葉というのがあって、また年齢というのもございます。反抗期の子供は権威に対して反抗的な言葉を取るといったようなことです。性格。内向的であれば無口で

すし、外交的であれば饒舌^{じょう}ということがあります。また、知能の問題もあります。こうした個人的な要素と、環境的な要素ということで出身地、方言ということがございますし、また社会的環境条件というのもございます。社会的環境条件と言いますのは、職業であるとか、階級、あるいは職業を使って特にその環境の中で話す専門用語とい

うこととなりますが、それとは別に文化・環境的要素というのがございます。学歴が高い、教養が高い人ほど文字言語行動が言語活動の大きな部分を占めると言われていますけれども、そうした学歴、あるいはマスメディアにどれぐらい触れているかということがございます。

また、70%の非言語的なコミュニケーションの要素の中身ですが、「こんにちは」という言葉は言語的な要素ですけれども、「こんにちは」という声の大きさであるとか抑揚、声の高さといったものは非言語的要素ということになります。また、身振り手振りのような身体動作であるとか、近接学ということで対人関係であるとか、あるいはどこに座るかといったような空間動作、また人工物ということで衣類であるとか化粧であるとか、そういったものは非言語的になる。また、照明であるとか、湿度といった物理的環境も含まれてきます。全体の中で30%だけが言語的な要素で、残り70%が非言語的な要素ということになりますので、純粋に言語的な要素だけを取り上げていくのであれば30%だけを取り上げていけばいいわけですがけれども、ここに絞っていくかどうか、また非言語的な要素まで入れていくかどうかというのがポイントかと考えます。

そして、コミュニケーションの発達史というものがございます。御存じの委員の皆様ももちろん多いかと思いますが、これが非常にコミュニケーションを複雑にしております、どこまで話し合うかということと関係していると思います。

まず、言語の発生ということで、生まれたばかりの赤ちゃんも泣いた声、泣き声でコミュニケーションしているわけですが、まず話をしてコミュニケーションをする。対人コミュニケーションということになるかと思いますが、音だけ、まず、最初に音声があって、そして人類のコミュニケーションの発達史から考えますと文字の発明と

いうことがあります。^{くさび}楔形文字であるとか、象形文字であるとか、そういった文字を使うようになる。子供も文字を使ってコミュニケーションをするようになる。保存性のあるコミュニケーションをするようになります。そして、コミュニケーションの発達史としましては、グーテンベルクの活版印刷の発明がございまして、出版文化ができて、マスコミュニケーションの時代が始まるわけですが、この後に電波塔ができてマスメディアの時代になる。今は第5段階の時代になっていまして、第5世代のコンピューター、スマートフォンなどのコミュニケーションツールを使ってコミュニケーションをしているということになります。

これをどこまで扱うのかということも大きな問題だと思います。第5段階の高度情報化による変革、コンピューターのところはツールの発達史と捉えることができるのではないかと。純粋にコミュニケーションと言った場合には、第1段階と第2段階、そして第3段階ぐらいまでを対象としていくのが妥当かなと考えております。これを第5段階まで入れますとツールはどんどん発達していくこととなりますので、非常に難しい問題になるだろうと思っています。

ここまでコミュニケーションの在り方について私の課題意識とコミュニケーションの目的や要素、また発達史を通じて課題の背景についてお話ししてきました。簡単にポイントをまとめておきたいと思います。

まず、中卒、高卒、大卒の新卒者の離職率の高さは、入社後極めて初期の段階のコミュニケーションに課題があるのではないかと考えています。ここにターゲットを絞るべきだと思っています。特に語彙であるとか、敬語、言葉の使い方の未熟さがコミュニケーションの基礎となる信用の妨げとなって、その信用の上に築くべき人間関係の構築もままならないまま、自己表現の場を得られないままに離職に結び付いていると考えております。コミュニケーションは多くの要素で成り立っており、特にツールはまだまだ発達を続けていきますので、言語的要素の30%に絞って、情報機器などの

ツールの扱いを対象から除いて、ターゲットを絞ってコミュニケーションについて検討することが必要かと、私見ですが、そのように考えています。

では、どう具体的にこの課題にアプローチするのかということです。配布資料4の中の資料2を御覧ください。経済におけるグローバル競争の激化などを背景に、1996年頃から日本の国際競争力の低下を懸念して、新しい人材像を各省庁が打ち出すようになりました。その最初が文部科学省の「生きる力」だと考えています。

これは1996年のものですが、確かな学力の中身を御覧いただきたいと思います。基礎、基本の回りに花びらのようにありますが、これまでは学力というと知識の量や演算などの知的操作の速度を差していましたが、主体的に問題を見付けて、熟考して、分析して、解決して、それを発信していくというコミュニケーション能力がここに内在していると私は思っております。コミュニケーションという抽象的な言葉を使わずに学力として位置付けたところに、「生きる力」のポイントがあるのかと思います。

配布資料4の中の資料3を御覧ください。内閣府の人間力戦略研究会報告書の「人間力」です。この中で、構成要素として「社会・対人関係力的要素」とあり、この項目として「コミュニケーションスキル」というのが入っています。ただ、具体的な中身というのはそれほど詳しく述べられてはおりません。これが2003年のものです。

その次、配布資料4の中の資料4を御覧ください。「就職基礎能力」、厚生労働省の作ったものですが、非常に詳しく語られています。先ほどはコミュニケーションスキルが項目になっておりましたが、厚生労働省の就職基礎能力では要素として位置付けられている。格上げされて取り扱われていると言えます。ここは非常に詳しく出ておりまして、恐らくですが、これをたたき台にして作ったのかと考えられます。

配布資料4の中の資料5を御覧ください。経済産業省の「社会人基礎力」になりますと、特にコミュニケーション能力という言葉は出てきません。コミュニケーションという言葉そのまま使わずに、三つの能力、12の能力要素と書いたところに大きな工夫があると考えています。これはカテゴリーではなくて、言い換えると三つのステージがあって、その中に12のステップがある。これをスパイラルに繰り返していくと、コミュニケーションスキル、コミュニケーション能力が付いていくというような図になっています。これをフローの形で示したところに非常に大きなポイント、分かりやすさがあると考えています。コミュニケーションというのは非常に抽象的な、多くの人がいろいろなイメージを浮かべる言葉ですので、コミュニケーションという言葉をあえて使わずに、分割してどのように示すのかというのが大きなポイントだろうと思います。この経済産業省の場合は、ステップとして分割をしたということが大きな工夫です。

そのほかに分割する方法としては、配布資料4の中の資料6を御覧ください。スキルで分割をして、パフォーマンスの到達度を示すという方法があります。これは全米大学協会による大学の教養ルーブリックと呼ばれているもので、ワシントンD.C.に拠点を置く全米大学協会が作成したものです。これまで15だったのが、現在は16提供されておりまして、これだけだと先ほどの「人間力」とさして変わらないのですが、これが単なるカテゴリーではなく、中身がルーブリックで示されているというところにポイントがあります。

配布資料4の中の資料7を御覧ください。先ほどのカテゴリーの中の文章によるコミュニケーションを詳細に示したもののなものです。文章によるコミュニケーションのルーブリックということで細かいスキルが書かれておりまして、標準レベルの1から最高レベルの4まで書かれています。これは評価として使うという印象が非常に強いのかと思いますし、また文部科学省もそういう方向でルーブリックを説明しております。レベル1だから悪い、というような使われ方もしますが、ルーブリックの元々の目的というのは高い／低いということではありません。現在、標準レベル1だったとした

ら、4に上がるまでにどのような学習をしていかなければいけないのかという、パフォーマンスを具体的に示したところに大きな特徴があります。先ほどのフローで言いますと、標準レベルの1から最高レベルの4へというステップと言いますか、フローがこのループリックでも表現できると考えています。このようなループリックが、なじみやすいのかとも考えています。

次に配布資料4の中の資料8を御覧ください。これは仮に入れたものですのでこのようにということではないのですが、ループリックを作る場合に、例えばコミュニケーションの目的ということで一番基礎的な「間違った仕事はしない」というところから、最後の「話し合い、理解を深める」というところまで目的で段階を分けて、さらに、その中にスキルを精選してそれぞれ入れて、これはアンケート調査などきちんと調査をした上で根拠資料を固めて精選していく必要があると思いますが、スキルを入れて、そして、右側の方がループリックになるということで示してみました。紙ベースですとなかなか難しいのですが、これをウェブ上に上げて標準レベル1のところをクリックすると、それがポップアップして具体的に敬語の使い方であるとか、語彙が出てくるといったような、これまでの文化庁でまとめてこられた様々なデータなどをそこに組み込んで、新社会人のコミュニケーションのための自学自習の助けにしているってはどうかというのが私の考えです。

言語を介したコミュニケーション、全体の30%ですが、特に初期の段階の目的でいうと1,2の辺りをしっかりと固めていくことがとても大事だろうと思っております。それはここまで文化庁がまとめてこられた関係する答申とうまくなじむのではないかと思います。

これまでNHKラジオの高校講座で10年間、国語表現1という番組の監修と講師を務めてきました。一昨年の4月からはNHKのEテレの高校講座の国語表現という番組で監修、講師を務めております。高校講座ですが、頂く視聴者からのコメントのほとんどが社会人の方からのものです。残念なことに高校生からのコメントはほとんどございません。そのコメントの内容は、番組を見て報告文が書けるようになったとか、あるいは提案書が書けるようになったとか、あるいは小説を書いてみようと思うようになったとかいうコメントです。学ぶ意欲のある社会人の言語生活をサポートする取組の必要性を強く感じています。以上で発表を終わりにしたいと思います。

○沖森主査

ありがとうございました。それでは、ただ今の入部委員による御発表について、直接関連することについて質問をお受けしたいと思います。何か御質問はございますでしょうか。

○関根委員

コミュニケーションの要素で言語的要素と、非言語的要素が3：7というのはどういう根拠というか、ある調査とか、何に基づくのですか。また、それは例えば時代的な変化もあると思うのですが、先ほど対面型コミュニケーションが少なくなっているということがありました。そうすると、むしろ言語的要素が増えているというような気がします。

○入部委員

先ほどの言語的な要素と、非言語的な要素、30%と70%がどのような調査に基づいているのかということですが、コミュニケーション学の中でそのように言われているというものです。年代によって違うということであればそのような気もしますが、その辺は調査をしっかりしていく必要があると思っています。

○川瀬委員

入部委員のお話に直接ではなくて、むしろ事務局の方にお伺いしたいのですけれども、入部委員にはどういう意図で、どういう話をお願いしますというお願いの仕方をなさっているのでしょうか。今回、入部委員からお話いただいたことの理由と目的と言いますか…。

○鈴木国語調査官

お願いしたのは、まず、現代の時代的なものをどう捉えるか。その中で浮かび上がっている、例えば具体的に見られる課題としてどんな事柄があるのか、それに対してどういう処方箋が、特に国としての対策が考えることができるのかという、そういう要素を盛り込んでいただくようお願いをしました。

○福田委員

最後のところで、ウェブ上にループリック化したものを載せて自学自習できるようにするというお話だったのですが、その「自学自習」というのは具体的にはどのようなことを、もしお考えがあるなら教えていただければと思います。

○入部委員

そのところを話し合ったらどうかという提案です。「敬語の指針」であるとか、あるいは「改定常用漢字表」という中に例がたくさん出ておりますので、それをうまくカテゴライズして、一遍にというのは難しいので、まず例えば最高レベルのところは実社会の中で出現頻度の高い、少し難しい、ビデオ視聴した中で「制御」という言葉がございましたが、そういったものを入れていけばいいのかなという、イメージとしてはそのように思っています。

○福田委員

そうすると、何かテストをして、やった方が大体この辺だというものではなく、自分の目安としてどうなるのかという説明をするものですね。分かりました。

○石黒委員

アンケートをお取りになった資料1が面白いと思いました。どのようにして作られたのかというのが率直な質問で、イメージとしては社会人が仕事としてできるコミュニケーションを第一に考えていच्छやるということだと思うのですが、例えば率直な意見を述べると言ったときに、普通、社長に対して自分の率直な意見はこうですと、根拠はこうですと言ってもけんかになると思うのです。だから、円滑な人間関係を構築できるようになり、かつ信頼と秩序を保つことができるようになった上で初めてそれができるといふ、多分そういう積み上げ式だと思うのですが、これはどのようにしてお作りになったのでしょうか。

○入部委員

コミュニケーションの目的ではなくて、率直な意見を述べるの中身でしょうか。

○石黒委員

中身ではなくて、そのようにうまく段階立てて下から上へという積み上げ式になっているように思ったのですが、それがどういうものを参考にして、どのようにして作られたのかという、背景を伺いたく思います。

○入部委員

このコミュニケーションの目的については、コミュニケーション論というかコミュニケーション学という一般的なものを使って組み上げております。率直な意見を述べるところにフォーカスして授業では行っております。根拠を踏まえて何か抗議文を作るとか、反駁^{はく}状を作るとかいった学習をしております。そういうこともありましたので、こういう項目が並んでいるのですが、6段階ではなく8段階という方もいるかと思いますが、一般的なものを使っています。

○関根委員

関連質問ですが、質問項目のA, B, C, D, Eもある意味で積み上げ式なわけですね。とすると、「漢字が書ける」が最初で、次が「読める」なのですが、一般的には「読める」の方が先かという気がするのですが、そういうことではないですか。

○入部委員

これは特にそこまで考えずに、項目として並べているだけです。ビジネス文書によく出てくる、頻出の熟語を毎回漢字テストしているのですが、書けるか、読めるか、意味が分かるかということをやっているので、それを張り付けただけで、Aが先かBが先かというところまでは特に考えておりません。

○福田委員

再びアンケートの結果ですが、「N」のところに「自信がある」と答えた学生さんが30名とかなり高かったような気がするのですが、これに関しては入部委員はどのようなお考えなのでしょう。

○入部委員

これは学習を背景にしているものですから、学生の頭の中には学習の成果としてこれに付けたというところがあります。4回ぐらい模擬裁判をしております、その中で裁判員という形で話合いの学習をします。自分の根拠が正しいと思っていてもほかの人の根拠を聞いていて、その人の根拠と主張がより結び付きが強いと感じたときには、自分の意見を捨ててほかの人の意見に乗り換えていきなさいという指導をしているので、それが反映されているという事情がございます。

○川瀬委員

コミュニケーションの発達史のところ、最後の高度情報化による変革というところがあって、ここには踏み込まない方がいいかもしれないとおっしゃっていました。社会人基礎力の働くためとか、意思疎通のための読む、書く、聞く、話すであれば確かにそうかとは思いますが、やはり今の時代性というものを考えるとコンピューターやインターネット、もしくはスマートフォンなどの影響というのは、コミュニケーションという意味では外せないのではないかなという気もしたのですが、その辺りはいかがお考えでしょうか。

○入部委員

今日は意見を言っている場というか提案という場でしたので、私は踏み込まない方がいいのかなという意見を申し上げました。特に最初の段階の1と2をしっかりと固めるのが文化庁のこれまでのいろいろな答申などが生かせるのかということもござい

ます。漢字の読み間違いがありますと、その後、仕事を任せてもらえないということもあり、そこまでは踏み込まない方がいいというのは私見でございます。

○沖森主査

ほかに特になければ、御発表への質疑応答を終えたいと思いますが、いかがでしょうか。入部委員，どうもありがとうございました。

○入部委員

ありがとうございました。

○沖森主査

それでは、引き続き入部委員の御発表にも関連することもあるかと思いますが、いろいろなお考えを各委員お持ちだと思います。参考資料として様々な提言の内容も御紹介がありました。

それでは、御自由にコミュニケーションの在り方，あるいは言葉遣いの問題などについて御発言いただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

○福田委員

事務局に対するものだと思うのですが、二つほど質問があります。本日，入部委員のお話を聞いて思ったのですが，対象はどのぐらいの年齢層を考えていらっしゃるのでしょうか。それから，私は文科省の方で言語能力向上のチームに入っておりますが，文部科学省の方では「言語能力」という言葉を使っていて，例えば言葉そのものの知識みたいなことも結構入ってきております。それと，ここで扱うコミュニケーション能力という区分けはどのようにお考えなのか，2点伺います。

○武田国語調査官

まず，対象の方からお話ししたいと思います。対象というのは，国語施策においては社会全体ということになりますので，例えば具体的にある層だけを決め打ちということにはならないと思います。ただし，こういった議論をするときにはある程度，どの辺りの方々に対して手当てをする，実際に出すものは社会全体であっても，議論のときの一つの焦点においてこの辺りの人たちを意識してということはあるかと思えます。そういったある部分の人たちを意識して議論することによって，それが社会全体に有用なものとして受け入れられていくということになるのかと思います。

2点目の御質問ですけれども，これも事務局として例えばコミュニケーションという問題はここからここまでの範囲であるとか，これと切り分けるというような具体的なものを今持っているわけではありません。というのは，先ほども少しお話し申し上げたのですが，これまでの御議論の中で例えばコミュニケーションというものを一定のところに定義付けるといって，型を決めて話をするというよりはむしろもっとぼんやりとしたようなところでお話がなされていたと思っています。

一つ印象的な御意見として覚えているのが，今，言葉遣いということも出ているのですけれども，コミュニケーションというものをより向上させるために，きれいな絵を描くために言葉遣いという様々な道具があって，絵の具があって，それを一つ一つそろえていくようなことが文化庁としてできることなのではないかというような御意見を頂いたことがありました。コミュニケーション能力というと非常に抽象的な話になってくるのですけれども，抽象的なところをある程度一つの指針としてまとめていくと同時に，それをいかに皆さんに役立てていただけるような具体的なものにしていくのかという，コミュニケーションという言葉の中身を詰めていくこととともに，

それをいかに具体的なところに落としながら話をしていくのかということではないかと思っております。

例えば言語そのものの知識についても、今、学習指導要領の検討の中で話題になっているということがありましたけれども、当然ここでの議論は、今、学習指導要領の改訂が進んでいますので、それを横目に見ながら進めていくべきものだと思いますので、必要があれば、そういった議論も紹介してまいりたいと思います。

○福田委員

はい。分かりました。対象は社会全体であるというのはよく理解できるのですが、ここで話し合うときの対象が、同じものを見ていないとなかなかかみ合わないのではないかと思います。それも含めて今後検討していくということでしょうか。

○鈴木国語調査官

今のことに関しては、例えば「これからの時代に求められる国語力について」の議論のときにも同じ問題がやはり生じました。そのときも、事務局の方でこの年代にしてくださいというお話をしたわけではなくて、同じような話題が出てきて、それならばどういうところをターゲットにしましょうかと議論になりました。議論の中では学校教育の段階という話もありましたが、学習指導要領がありますから、そういう話も出つつも、国語施策の場合は社会全般に対してだからということで落ち着いたところは、大体社会に出て何年かたったぐらい、要するに若い、新卒というよりはもう少し、何年か経験したぐらいの年代の成人のイメージというのが一つ想定されるところであろうというところで合意が得られ、その想定の下に議論を進めていったという流れがあります。

ですから、今回についても初めから事務局でこの年代でというよりは、どういう年代を想定して議論していくのが最もこの問題をやる上でいいかということも御意見を頂いて、では、ここの辺りでということで更に詰めてという形で進めていくことになろうかと思います。今の段階での回答は先ほどと同様に国民全体に対してという回答以上のところまで、具体的なものはないということです。

○川瀬委員

先ほどのコミュニケーションというきれいな絵を描くための絵の具を用意するというのはすごくイメージとして分かりました。さて、その画材が油絵の具を使える世代なのか、それともクレヨンの方がいいのかというのは大きいところだと思います。それが今、福田委員からあったどの世代というところに直結するのかと思います。

社会に出て数年たったぐらい、中学校を出て社会に出られた方と、大学院を出られた方とは違うと思います。大学院を出られた方は、この場の論議にはまたそぐわない方たちなのかもしれませんが、ある程度将来を見据えたということを考えると、やはり若い世代と考えるべきでしょうか。若いというのが、では何歳なら若いのか、30ならもう若くないのかとか、いろいろあるのかもしれません。

○岸本国語課長

年齢と言いますか、先ほどの入部委員の御発表にもありましたが、社会人で学ぶ意欲を持っている人を後押しするようなことも必要なのではないかと考えます。年齢というよりは学ぶ意欲を持っている人を後押ししていけるような、そのために具体的にどういうことを考えていけるのかということなのだろうと。その大半がもしかしたら20代とか、社会に出て数年ぐらいの方とかになるのかもしれません。また、もう少し幅広く、一つ目の職をリタイアされた方とか、そういう方までお入りになるのかもし

れません。

対象の切り分け方によって画材が違ってくるので、もう少しフォーカスした方がいいということであればそういう分け方、対象に応じた処方箋を考えていただく必要があるのかもしれませんが。今のところはまだそこまで具体的には考えておりません。

○関根委員

対象年齢については、世代間のコミュニケーションギャップみたいなことも前からこの場では話し合われてきたと思います。そうすると、必ずしも若い世代だけを教育すればいいという問題ではないような気がします。年配者たちが若い世代を理解するといった姿勢もコミュニケーション能力の一つだと思います。

もう一つ。入部委員の最初の御発表はかなり衝撃的で面白かったのですが、入部委員は、基本的に一番必要なのは言葉の力だというようなことをおっしゃっていました。先ほどのコミュニケーション能力についての1から6までの表を見ても、例えば「最初の漢字の読み書きや意味が分かる」と、次の「敬語が使える」というところまでは、コミュニケーションというよりは、コミュニケーションをするための基礎力のような感じがします。敬語に関しても、まず敬語の知識があって、そこからコミュニケーションに入ると思うのですが、そうするとどこまで広げていいのか、つまり、一番大事な、一番基礎的なことだと語彙力みたいなところなのかなという気がします。

そうすると、例えば先ほどまとめてくださったコミュニケーションスキルと関係する答申のところで、確かに最初の漢字に関しては常用漢字表というものが出ています。でも、ビデオ視聴の際に出てきた「差異」にしても常用漢字です。常用漢字表の「差」のところにきちんと例として「差異」という熟語が載っています。しかし、分からないという。だから、常用漢字表だけでは1はクリアできないと思います。

そうすると、1に集中してやるのであれば、今まで常用漢字表で単漢字を選ぶというところで終わっていて、用例は用例を挙げただけというところがあって、それをもう少し施策として、例えば「差異」が使えるようになるように、常用漢字表のような漢字表ではなくて、例えば日本人がコミュニケーションを円滑に行うために最低限必要な基礎語彙表みたいなものを作るとか、そういうこともあるかと思います。

そこから入っていくと、最終的にコミュニケーション能力という6番に行くまでにかなり遠大な計画になります。その辺を組み立てて、どうできるのか、それはある意味で同時進行でもいい気がします。

今までまとめてくださっているこれを見取り図にして、例えばこういうところだったら何か具体的に指針の形でできるとか、あるいはこの辺は理念の形で補強していくとかいうこともできるのかもしれませんが。ただ、遠大だという気がします。でも、最初が大事だというのは、私も前からここで意見を言っているところですが、その辺がもしできるのであればやりたいと思います。ただ、それが期待するところのコミュニケーションというものと少しずれてきてしまうというか、最初の積み上げが大変だなと思います。また、それなりにそれも時間が掛かります。

○入部委員

6まで挙げましたが、今、関根委員がおっしゃったとおり1番だけでもとても大変な作業だと思うので、3番ぐらいまででもいいのかなと考えました。その中に必要なスキルが、これは三つずつぐらいしか入っていませんが、もっと細かく分けて、このところを固めないと、先ほど離職率を挙げましたが、実際にはアルバイトを1年間に20も替える学生がいるのです。多くの場合は漢字が読めず、マニュアルが読めなくて、結局、辞めることになってしまうといったことがございますので、基礎をしっかり固めていく。確かに論理的な表現力があってきちんと使えたり、あるいは人間関

係が構築できたりすればいいのですが、非常に高い理想であって、足元から固めていく、特にあるものを使ってうまく活用していくということがこの小委員会の中でできることなのかと、基本的にはそう思っています。

○塩田委員

コミュニケーション上の問題点、克服すべき障害があるからこういう会を持つのだと思うのですが、さて、どういう問題があるかと考えてみると、主に要素として、分かる／分からない問題、あるいは分かりやすい／分かりにくい問題という要因と、もう一つは感じがいい／感じが悪い問題、印象がいい／印象が悪い問題、主にこの二つの要因で説明できるのではないかという感じがします。

分かる／分からない問題の要因については、いわゆる国語力です。国語能力、国語力、漢字も含めた国語力、あとマスコミの言葉の分かりにくさであるとか、政治家や官僚の言葉の分かりにくさ、あるいは医療用語の分かりにくさ、介護用語の分かりにくさ、こういう問題は今までも取り上げてきていると思います。

一方、感じがいい／感じが悪いというのは、例えばいじめにつながる言葉とか、ヘイトスピーチの言葉というのはものすごく分かりやすいです。分かりやす過ぎるぐらい分かりやすい。

しかし、コミュニケーションの問題という点では同じで、感じが悪い問題でいうといじめとかヘイトスピーチとかの問題です。私などは、社会人とか組織の中で行動するというのは分かりやすい／分かりにくい問題よりは、むしろ人間関係に関わるいい感じか／悪い感じか問題の方が要因としては強いのではないかと思います。例えば、それ以外の地域社会での言葉遣いですとか、PTAとの付き合いをどうするかとか、地元の祭りでの付き合いをどうするかという問題、ネットの問題…。コンピューターを介した非対面の言語というのは分かりやすい／分かりにくい問題よりも感じがいい／感じが悪い問題の方が強いのではないかと思います。

そういったものを含めた上で、いろいろな世代差、年代差、あるいは地域差などがあるという構図で全体をざっと捉えてみると、今回事務局の方でどちらかというと感じがいい／感じが悪い問題の方で議論が発効しているのではないかと予測しておりました。私はそれは大賛成です。分かりやすい／分かりにくい問題も大切で、もちろんやるべきなのですが、こちらの分かりやすい／分かりにくい問題を土台に、後で感じがいい／感じが悪い問題に行くよりは、感じがいい／感じが悪い問題にはどんなものがあるか、そしてそれを克服するためにはどういうモデルを提示したらいいのか、という具合に議論を進めていった方が、個人的には意義があるように思いました。

○納屋委員

前回以来、私も一所懸命考えるのですが、どのように進めたらいいのかはまだ見えません。本日、入部委員からお話を伺って、当時のことを思い出しました。映像は、厚生労働省が若い人たちの働くこと、就職先への定着を後押ししているものだと理解しました。

「国語分科会で今後取り組むべき課題について」を取りまとめた平成25年の時点と、現在とでは状況が変化しています。この段階で言っていたコミュニケーションの議論では、文部科学省が考えていた子供たちのコミュニケーションの在り方の方に少し近かったのではないかと思います。しかし、今回の問題は、いわゆる国語力答申の総論に当たる部分のところに関わっていると思います。今なぜコミュニケーションの在り方を問題視しなければならないのかと、視点を提供しないと次が動かないのではないかと感じます。

さて、答申建議集の439ページですが、国語力の具体的な目安を示しています。どの

時点でどのようにすればいいか。読む，書く，聞く，話すという要素に分けて自分の力を診断できるように，という形で書かれていました。今回はこの言語の要素と，コミュニケーションの在り方とを合体していく必要があるのかと思います。

だから，入部委員がおっしゃっていましたが，若い人たちにとってみたら言葉の4要素のこの部分をこう注意するのがよいとか，若い人だけではないわけでお年寄りも，外国人の方もいらっしゃるわけだから，検討するとこの部分を発展させる必要があると思います。

また，岸本課長が御指摘になった2年間で何らかの成果物の形を，ということ考えた場合，ある程度の踏ん切りを付けていかないといけないというのが本音です。ですから，国語力答申型のものを作成するかどうかという見定めが必要だと思います。具体的な成果物を考えるにしてもどんな形になるのか，冊子がいいのか，それとも視聴者参加型のような，文化庁のホームページに掲載したシートを使うような形で提供するのか。そのような絞り込みをしないと進んでいかないと感じています。

○鈴木国語調査官

439 ページ，440 ページの望ましい具体的な目安について言及いただきましたが，これ自体はそこの前書きのようなところに書いてあるとおり，どの時点で切るということは非常に難しいという前提でやっておりました。そのため，生涯をかけて達成できたらいいな，飽くまでも，必須の達成すべきものではなくて，常に目標として持ってくださいねというものです。そういう形でしか出せないだろうというのが国語分科会で，これを検討していたときの考え方です。

ですから，例えば何年生ぐらいだったらどのぐらいと分けていくという考え方も議論の中にはありましたけれども，やはりそれは難しく，生涯を掛けてこういうことができるようにという示し方をして，逆にそういう示し方なので，余りここの部分というのは強く宣伝をしていないというところが正直なところございました。

○川瀬委員

これを全部達成できたら，すごいです，我が人生に悔いなしという感じです。今，納屋委員から2年間という期間である程度見極めをして，成果物の形も含めて考えていった方がいいのではないのかというのを聞いて思いました。やはり，正にそういう情報や知識の必要な方の手に渡るような形にしたいです。答申を上げて，冊子を作って，文化庁のホームページに載せることも非常に意義があるし，教育現場であったり，いろいろなところに波及していくとは思いますが，しかし，もっとフランクな形で，実際の若い世代の方，又は世代間コミュニケーションのギャップのある方が，それに触れられるようなツールと言いますか，配布方法と言いますか，それをお考えいただけるとうれしいと思います。

会議として成果が出ましたではなく，それが具体的にどのように人々に反映できるのかということも含めて，冊子1冊作るより，もしかしたら大変なお金が掛かってしまうかもしれません。しかし，メールとLINEでしか，しかもお友達としかコミュニケーションを取りませんという方でもそれに触れる機会を何か作れるようなものにしたいと思います。無理なお願いだろうという気もしますが，意識の高い方だけに見ていただくのではなく，今自分にそういうセンスがないのは薄々分かっているのだけれども，という人のところにまで届くようにしたいと思います。

○田中委員

どこのところに焦点を当てて議論していくのかといったことについては，塩田委員や関根委員などからお話がありました。私は，入部委員は知識の話がすごく重点的で，

それが大事だということは分かります。ただ、知識とその運用といったことで考えてみると、最初に配られた参考資料1で、論点4と5のところが積み残された問題であったというお話がありました。そう考えていくと、運用スキルというか、感じがいい／感じが悪くない問題という言い方がすごく分かりやすくてよかったと思うのです。そちらに焦点化してみるのもありなのではないかと考えました。そうしますと、情報化とか、国際化とか、それから関根委員が先ほどおっしゃっていた世代間の問題とか、ジェンダー間の問題とかも取り込むことができると思います。

どちらも大仕事なので、どちらもというのはすごく難しいと思います。知識の獲得といったようなところ、知識の充実、知識の浸透といった問題と、少なくともその運用は分けて考えて、どちらを攻めていくのかといったところは最初の議論として必要だと思います。私は塩田委員、関根委員がおっしゃったような方向が期待されているのかと思いました。知識も大事だけれども、その運用も必要なのかなといったところです。また、映像で出ていたような問題も、分からないことを調べたり聞いたりするということを知識などに位置付けるということを考えてもいいのかもしれない。

○鈴木委員

例えば一つの例として入部委員がお出しになられた「差異」という言葉が分からないことによって、問題が起きたことについてです。「差異」という言葉は国語辞典を引いていただければ、すぐその場で解決できた話なのですが、そういうことを伝え切れていないという、この議論とは離れた問題点もあると思います。

もう一つは、「差異」という言葉が分からなかったと同時に、先ほど石黒委員もおっしゃっていた「差異」という言葉が分からないまま行ってしまうという、これもコミュニケーションの問題だとは思いますが、少し外側にあるような、そんな問題としても捉えられます。

コミュニケーションというのは、コミュニケーション能力が不足だとか、コミュニケーションに問題があると思っている人の問題であって、コミュニケーションということについて問題だと思っていない人、又は今の時点で問題だとはまだ気付いていない人にとっては問題ではないのです。常用漢字表にしても、必要ではないという人にとっては問題ではない。それは何でもそうなのですけれども、ただ、どうしてもコミュニケーションということになると、読むにしろ、書くにしろ、話すにしろ、聞くにしろ、言葉の問題からは外れてはいないのですが、もっとずっと大きな概念になってしまうような気がします。

ですから、どうも、皆様方の御意見をお伺いしながら、正直言うと捉えられない、何を問題にしたらいいのかというのがまだ私自身整理が付かない。議論していくうちに、別の角度からの問題というのが、一杯出てくるような気がします。今の段階では、これをそういう方向に進めていったいいのかという意見を申し上げるだけの整理ができていないというところなんです。

○納屋委員

参考資料1の課題4と課題5で、武田国語調査官から説明があったように、今までコミュニケーションを話題としてきたときはどのように扱ってきたのか振り返る必要があります。そこを踏まえた上で、人間関係を作るような人間関係形成能力を持てたのだろうか、論理的な側面を持てたのだろうかかと判断できる視点をポイントにしてはどうかと言ってくださっています。この視点や、非対面、対面のコミュニケーションの問題などありますが、私は非対面のコミュニケーションが広がる世の中になっているのではないかと、心配しています。それがあと5年、10年先の世の中はもっと進んでいるのかもしれないと思います。

言葉の世界の問題とは別ですが、法律の世界でも、これからの社会では、ロボットが人間の仕事を奪うようになるから、それについてロボット法学という学会を立ち上げて、それに対応しようとしています。今回のコミュニケーションの在り方の問題も、見えていないところがあるのは当たり前だと思います。ただ、取り組む価値は絶対あると思いますので、先ほどの田中委員や鈴木委員がおっしゃっているところから何か出していく必要があるのではないのでしょうか。

○秋山委員

私も、非対面コミュニケーションが非常に進んでいて、そのことによって学校教育の中でも、先ほどいじめの問題というお話も出ましたが、いわゆるICTの画面に対しては何でも言えるのだけれども、本音を人に対しては言えないということがあります。

今、大学でも、意見を言えと言っても、手を挙げない。しかし、マイクを向けると言う、仕方ないから言う。でも、みんなの前で言うと、先ほどの感じいい／感じ悪いになるのでしょうかけれども、これは大丈夫なのかなというような不安感の中に若い人たちがいて、ものが言えないのかということも感じます。

それから、「差異」という字が読めないというのを、先ほど鈴木委員がおっしゃったように辞書を引けば分かる。もう一つは、分からないことがあったら人に聞けば解決できる。それなのになぜか解決を自分でしないで、自分の頭の中で完結して物事を進めていって失敗している人が実際、学校現場にもいましたし、子供たちの中にもいました。

また、言葉のやり取りで合意がないから、きちんとした自分の言葉が伝えられなくて誤解を招いているということがある。納屋委員もおっしゃったように、今後、多分、本当に非対面的なコミュニケーションは進んでいくと思うし、お医者さんに行ってもパソコンを見ながら患者さんを見ないで話をするようなお医者さんもいるということもお聞きしています。その中で国全体への警鐘というか、非対面コミュニケーションがどうなっていくのか、かつそうなることが危惧されるから対面コミュニケーションを尊重していくような、人間関係作りなど、そういうところで絶対にコミュニケーションが必要になるのだという何か提案ができたらいいのではないかということとはとても感じました。ですから、関根委員、田中委員、塩田委員がおっしゃっているお考えに私も賛成です。

○石黒委員

多様な意見が出てきて、なかなか頭の中も整理がつかない状態なのですが、最初の方で事務局から「国語に関する世論調査」に関して、12月ぐらいに問いの方針をまず絞って、それから2月ぐらいに調査をというお話があって、川瀬委員のお話にもあったのですが、最終的にどういうものを皆さんに公開していくのか、その最終形も見ておく必要があるという気がします。いろいろな調査にもやり方があると感じています。

まず、今日の入部委員のものでいうと、その調査自体が意識に関わるもので、これはまず基本となるし、その意識の量的調査というのはこれまで文化庁が得意にしてこられた分野だろうと思っています。

一方で、意識と実態の乖離^{かい}ということがあって、自信满满だけれどもできない人もいれば、自信がないけれども実はできる人も世の中にはいます。実際、コミュニケーションというのがコミュニケーションの現場の中でどう行われているかという実態の把握ということも同時に重要になってくるだろうと思います。それだけではなくて、

量的な意識調査ではなく、意識調査というか、例えば学生などでも自分は「コミュ障」だと言って、コミュニケーションに全然自信がない、下手をすると引き籠もっているケースもあります。そうした中で実際に、私は日本語教育の人間なので、日本語を第一言語としない方がどういう困難点を持っているかということ进行调查していますが、同じようにコミュニケーションを苦手とされている方がいる以上、そういう方がどんな意識を普段持っておられるのか、そこも知りたいと思います。それはアンケートよりも個別に、いろいろ細かくインタビューか何かで匿名性を確保しながら聞いていく必要もあるだろうと思います。

また、それとは全く別の観点として、川瀬委員がおっしゃったように具体的にいろいろな方に、こうすれば自分のコミュニケーションが改善できるという考え方とかツールをいかにそういう方たちに直接アクセスしてもらえるかということも重要だと思います。そうすると調査というよりも情報収集と言うか、今こういうような取組がなされているということ、文化庁のサイトか何かで、様々な能力、コミュニケーション能力開発ツールとか、こういうような考え方みたいなものを整理して示すということも重要ではないかなと思います。まだ時期が早いかもしれませんが、最終的に国民の皆さんに示すような最終形を少しずつ考えてもいいのかなと思いながらお話を伺っていました。

○沖森主査

どうもありがとうございました。

いろいろとまだ御意見があるかと思いますが、この辺りで、本日の御意見を頂くのは終了させていただきたいと思います。いろいろな御意見がありまして、私も今いろいろ考えたところです。大きな問題は「コミュニケーション」という言葉の定義付けがまず一番重要で、それとあと、2年間で何か成果を出すのならどんな形になるのかということも考えながら今後進めていく必要があるのかなということ、大ざっぱな印象ですが、思いました。

ここで御発言を終わりだと言ってしまいましたが、いろいろとまだ言いたいこと、あるいは御提言があるかと思うので、それは是非とも事務局の方に御連絡いただきたいと思います。いつでも結構ですので、御意見をお寄せいただきたいと思います。

今後もしばらく事務局と相談しながら、いろいろな専門分野をお持ちの委員に、本日の入部委員のような形で御発表をお願いしていきたいと思っております。入部委員には今日、御発表いただきまして本当にどうもありがとうございました。

本日の国語課題小委員会、これで閉会といたします。本日の御出席どうもありがとうございました。